



Title	退官によせて : 共に学ぶ心
Author(s)	秋葉, 力
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 12: 53-53
Issue Date	1991-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8564
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

退官によせて

共 に 学 ぶ 心

秋 葉 力

10数年前のことである。

待望の体育館では、学生たちがこれまでの練習不足を心ゆくまで満たそうと、それでもまだ広さは十分でないため、各サークル交替制のなかで、時間を惜しんで練習に励んでいた。床がいつ抜けるか分からない40年近くも使った木造の屋内運動場では、これまで思う存分の練習はできなかったに違いない。

どんな使い方をしているのかなと思い、ある日の5時過ぎに立ち寄ってみた。体育館の半分には3台並べて卓球が行われていた。奥の半分はバレーであった。校舎建築の監督に来ている文部省工事事務所の若い3人が、仕事を終えた一服か、学生たちの熱の入った練習に見入っていた。もちろん、この人たちはこの体育館も設計し、建築の監督に当たった人たちである。

他人の練習を見ていたっておもしろいはずはない。多分自分たちもやってみたいと思っているに違いない。止せばよいのに、おせっかいな私は練習をしている学生に、我々にもちょっとやらせてくれないか、と頼んでみた。案の定、試合も近いし時間を惜しんでおりますのでお貸しできませんと、いとも簡単に断られてしまった。

当然のこととはいいながら、断られると、いい気持ちはしない。

何故、いい気持ちがしなかったのか、後でゆっくりと考えてみた次第である。

独りよがりの考え方もかもしれない。学生たち自身、使う権利があり、他人に貸す理由はないと考えているのではないか、と思った。卓球に対する理解・興味を多くの人に持たせる努力が彼らにあるのだろうかとか、体育館ができた喜びを皆で分かち合うことができないのだろうか、などなど考えてしまったのである。

その頃、地学研究室に庭球を得意とする者がいた。彼は、新しくテニスコートを造っているのを見て、「ドシコートが造ってもどうしようもない」と、吐き捨てるように私に言う。

この言を広げていけば、学校教育は教師にまかせてくれということになるし、地学のことは専門の研究者にまかせておけばよいので、素人の口出しすることではない、という考えにたどりつく。スポーツは楽しむものだが、競技は素人の口出しできないものと考えているかのように聞こえて、返す言葉もなかった。

学問が大衆の中で育ち、スポーツが大衆とともに生きるという喜びが、特権意識の中からは湧き出ようはずもない。しかし、これは大学教官の私にも問題がありそうである。

「先生と呼ばれる程のバカでなし」と思っていたのは、就職した頃の30数年前のことである。学生と共に学んでいきたいと思っていた「初心」が、いつの間にやら「先生」と呼ばれないと不自然に聞こえるようになってしまっている。

大学は教官・事務職員・学生が一緒になってつくるものだという建前は、私にとって絵に描いた餅に過ぎなかった。

(本分校 地学研究室)